

自立活動の指導上の留意点(指導内容の設定)

ア 主体的に取り組む指導内容

子どもが興味を持って主体的に取り組む、成就感を味わうとともに、自己を肯定的に捉えることができるような指導内容を取り上げる。

＜主体的に取り組む、成就感を味わうために・・・＞

子どもにとって、解決可能で、取り組みやすい内容にする。

子どもが興味・関心を持って取り組めるようにする。

子どもが目標を自覚し、意欲的に取り組んだことが成功に結び付いたということを実感できるようにする。

＜自己を肯定的に捉えるために・・・＞

子どもが自己に対してどのような感情を抱いているのかを把握し、成長に即して自己を捉える感情を高められるようにする。

イ 改善・克服の意欲を喚起する指導内容

子どもが、障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を高めることができる指導内容を重点的に取り上げる。

障がいによる学習上又は生活上の困難を改善・克服しようとする意欲を喚起できるようにする。

ウ 発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容

子どもが、発達の遅れている側面を補うために、発達の進んでいる側面を更に伸ばすような指導内容を取り上げる。

子どもの発達の進んでいる側面にも着目する。

子どもが自信を持って意欲的に取り組む態度を育成するとともに、少し努力すれば達成できるような目標や内容の設定を行うなど、改善・克服のための取組を行う。

エ 自ら環境を整える指導内容

子どもが、活動しやすいように自ら環境を整えたり、必要に応じて周囲の人に支援を求めたりすることができるような指導内容を計画的に取り上げる。

＜自らが環境を整える＞

子ども自ら環境に働き掛ける力を育む。

＜必要に応じて周囲の人に支援を求める＞

自分だけで活動しやすい環境が作れない場合は、周囲の人に依頼して環境を整えることができるようにする。

オ 自己選択・自己決定を促す指導内容

子どもに対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げる。

子どもが目標を自覚し、改善・克服するための方法等について、自ら選んだり、物事を決定して実行したりするようにする。

カ 自立活動を学ぶことの意義について考えさせるような指導内容

子どもが、自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げる。

自立活動での学習が、将来の自立や社会参加にどのように結び付いていくのか、子どもが自らその関係を理解して学習に取り組めるようにする。

キーワードを詳しく解説！！

◎ 自己を肯定的に捉える

障がいのある子どもは、ときには、自分をひどく他者から劣っていると思うことがあります。「自己を肯定的に捉える」感情は、自分にも良いところがあると認める感情であり、自己肯定感や自己有能感と言われることもあります。学校の教育活動全体を通して行われますが、自立活動の指導においては特に重視されなければなりません。

【指導におけるポイント】

- ・ できるようになったことやその過程での変化を称賛し、自分の存在を認められ、受け入れられているという安心感を得られるようにします。
- ・ 自分について振り返る機会を適宜設定し、頑張っている自分を確認したり、過去と比較して成長していることが実感できるようにします。
- ・ 自己を客観的に捉えらえるようにすることも大切です。発達の段階に応じて、他者との比較や何らかの基準によって自己を客観的に捉えらえるように、適切に指導します。

◇ 同じ障がいのある年長者がモデルとなることもあるので、先輩の話聞く機会を設けることも有効な方法の一つです。

◎ 発達の進んでいる側面を伸ばす

【指導のポイント】

一般に発達の遅れた側面やできないことのみに着目しがちだが、苦手なことやつらいことを繰り返し行うことは、効果が現れるのに必要以上の時間を要したり、方法によっては子どもの学習への意欲を低下させ、劣等感を持たせることも考えられます。発達の進んでいる側面を更に促進することによって、子どもが自信を持って学習に取り組む態度を育成するようにします。

これは、発達の遅れている側面や改善の必要な障がいの状態に対して取り組まなくてよいということではありません。改善・克服のための取組も併せて必要です。常にPDCAサイクルを意識しながら、子どもの状況等を評価し、課題を改善していくことは、教師に求められる専門性の一つでもあります。

◎ 自ら環境を整える

障がいのある人々を取り巻く社会的状況の変化の中で、障がいの状態を捉える上で環境要因が重視されており、周囲のサポートを得ながら自分らしく生きるという考え方が広がっています。子どもが、困難を改善・克服するために必要な知識・技能等を身に付けるとともに、活動しやすいように環境を整えることが重要です。

【弱視の子どもの例】

読書をする際、適切な明るさを確保するために照明等の準備をしたり、準備ができない場合に他者への依頼の仕方を学んだりします。

【自閉症のある子どもの例】

不快に感じる音や光、雰囲気等を避けるために場所を移動したり、移動することを周囲の人に伝えたりすることを学習します。

◎ 自己選択・自己決定を促す

【心臓疾患のある子どもの例】

幼い頃から治療をしても、自分の体調や病気の状況について説明することが難しい子どもがいます。病気の自己管理が大切であり、その上で自らの活動を選択し、人に伝える力が必要です。そのためにも、自分の体調や病気の状況について正しく捉えるとともに、日ごろから体調や病気の状況を記録したり、人に伝えたりするなどの表現方法を身に付けることで、体調のほか病気の状況を自覚し、今の状況で何ができるか、どの程度できるかを的確に判断する力を身に付けられるようにすることが大切です。

◎ 自立活動を学ぶことの意義について考える

【「6コミュニケーション(1)コミュニケーションの基礎的能力に関すること」の学習では…】

発声や指差し、身振りやしぐさなどをコミュニケーション手段として適切に活用していくことは、子どもが自立と社会参加を果たす上で様々な人と関わる際に、欠かすことのできない基盤となる力です。このような自立活動を学ぶことの意味に自ら気づき、目的意識を持って、主体的に学習に取り組めるようにしていくことは、子どもの自立活動に対する学習に取り組む力を高め、将来の自立と社会参加を実現する又は果たす上で非常に重要です。